

豊かな言語感覚を育む「書くこと」領域における学習指導（第二年次）

—「視点」を基に相互に検討する学習を通して—

長期研究員 渡邊 潤平

《研究の要旨》

本研究では、中学校国語科「書くこと」の創作の授業において、豊かな言語感覚を育む学習指導を目指した。「視点」（表現技法等）を見いだす学習活動や「視点」を基に相互に検討する学習活動の中で、自分の思いやイメージを読み手により正確に伝えるために、適切な言葉や効果的な「視点」を吟味し豊かに表現しようとする生徒の姿が見られた。

I 研究の趣旨

平成29年度の全国学力・学習状況調査の結果から、本県生徒は記述式問題に課題があることが明らかになった。実践校においても同様の傾向があり、アンケートで、「国語科の学習（「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと）」の中で最も苦手なもの」として「書くこと」と回答した生徒が最も多いという結果が出ている。そして、「書くこと」を最も苦手とする理由を生徒に尋ねると、「どのように書き表したらよいか分からない」という回答が最も多かった。このことから、生徒の「書くこと」に対する苦手意識は、書き表し方が分からないことからくるものと推測できる。しかし、書き表し方を授業者が教え込む指導ではこの課題を解決することはできないと考える。生徒が自ら言語感覚を働かせ言葉を吟味する過程がなければ、活用できる力として身に付かないであろう。書いて表現することにおいては、自分の思いやイメージと向き合い、どのような言葉にすればそれが相手に伝わるものになるのかを自ら考えることが大切となる。そこで、創作に焦点を当て、豊かな言語感覚を育むことを目的として研究を進めることとした。

第一年次の実践では、生徒の多くが、いくつかの中から言葉を選んだり、「視点」※1を使ったりして表現することができるようになった。しかし、授業者が、言葉や表現について友達と交流し吟味する活動を効果的に位置付けなかったため、実践後の意識調査において、相手意識が不十分であるという結果が出た。そこで二年次である本年度の実践においては、自分の思いやイメージを読み手により正確に伝える意識をもたせることに重点を置き、言葉や表現を生徒同士で相互に検討する学習を柱に据えた実践を行うこととした。

※1 「視点」・・・情景描写、心情描写、人物・行動描写、擬音語、擬態語、押韻、比喩、倒置法、視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚に訴える表現の工夫のこと。

II 研究の概要

1 研究仮説

中学校国語科の「書くこと」領域において、以下の手だてを講じた学習指導を行えば、自分の思いやイメージを読み手により正確に伝える意識を伴った豊かな言語感覚が育まれるだろう。

【手だて1】「視点」を見いだす学習活動

【手だて2】相互に検討する学習活動

(1) 「豊かな言語感覚」について

次期中学校学習指導要領解説国語編では、言語感覚とは、「言語で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜などについての感覚のこと」と説明している。それを踏まえ、本研究では、「豊かな言語感覚」について、自分の思いやイメージを読み手により正確に伝えるために、適切な言葉や効果的な「視点」を吟味したり、言葉や表現からイメージを膨らませて感じ取ったりする感覚のことととらえるものとする。

(2) 本研究で目指す生徒像

自分の思いやイメージを読み手により正確に伝えるために、適切な言葉や効果的な「視点」を吟味し豊かに表現しようとする生徒の育成を目指す。

2 研究の内容

(1) 【手だて1】『「視点」を見いだす学習活動』について

生徒が検討のよりどころとなる「視点」について共有することで相互に検討する学習が深まると考えた。そこで、クラス全体で「視点」を共有する場を意図的に設けることとする。「視点」が使われている作品と使われていない作品を、または、同じ「視点」が使われている作品同士を比較させ、「視点」のよさに気付かせたり、読み手に与える効果を実感したりしながら生徒に「視点」を意識させる。

(2) 【手だて2】「相互に検討する学習活動」について

創作した短歌や物語の言葉や表現について、生徒同士で検討し改善する学習活動である。自分の伝えたいイメージと読み手が受けとったイメージとの違いを知り、自分の伝えたいイメージをより正確に伝えるための適切な言葉や効果的な「視点」を吟味するために、生徒同士で相互に検討する学習活動を行う。

3 研究の実際

(1) 授業実践単元について

研究対象	中学校第2学年	28名（1クラス）
実践 I	「短歌をつくろう」（7月，8時間）	
実践 II	『『ある日の自分』の物語を書く』（10月，8時間）	

(2) 実践 I 「短歌をつくろう」

短歌の創作活動を通し、自分の思いやイメージを読み手により正確に伝えるために、適切な言葉や効果的な「視点」を吟味し豊かに表現できることを目指して単元を構想した。

① 【手だて1】の実際

〈気づきを促す比較〉

以下のように「視点」が使われている短歌と「視点」が使われていない短歌を並べて提示し、どちらの短歌から作者の気持ちが伝わってくるか、なぜそのように言えるのかを考えさせた。下線と【 】は授業者が付記したものである。

1	部活動負けて会場外出れば大粒の雨ふりつづける【「視点」（ <u>比喩・情景描写</u> ）が使われている】
2	部活動負けて会場外出ればいつもと違いとても悔しい【「視点」が使われていない】

生徒からは、「1のほうが伝わる。2は『とても悔しい』の所が子どもっぽい」「1は悔しい時の場面が2よりも詳しく想像できる」「1は気持ちをもので表している。悔しい気持ちを大粒の雨で表現することで、ただの悔しさではなく、涙が出るほど悔しいことが伝わってくる」などの意見が上がった。このように伝わり方の違いに気付かせ、読み手に与える効果を実感させた上で、比喩と情景描写について学習した。

② 【手だて2】の実際

〈イメージの違いを感じさせる場の設定〉

4人でイメージのずれを見だし、ずれを埋める検討活動である。まず読み手の3人は短歌だけを読んで伝わったイメージを作者に伝える。次に作者が、伝えたかったイメージを3人に伝える。このようにしてイメージのずれを見だし、そのずれを埋めるためにはどのような言葉や表現にすればよいか検討を行った。検討の際は、

「視点」が明記されたシートを手元に置いたため、「視点」を踏まえて言葉や表現を提案する姿が多く見られた。

(3) 実践 II 『『ある日の自分』の物語を書く』

自分を主人公にした物語の一場面の創作活動を通し、自分の思いやイメージを読み手により正確に伝えるために、適切な言葉や効果的な「視点」を吟味し豊かに表現できることを目指して単元を構想した。

① 【手だて1】の実際

〈気づきを促す比較〉

同じ「視点」が使われている昨年度の2年生（現3年生）が創作した『『ある日の自分』の物語』二つを提示し、二つの物語に共通する表現の特徴について気付いたことを生徒同士で話し合う活動を行った。生徒はどちらの物語にも共通して気持ちが風景で表されていること、心のつぶやきが直接書かれていることに気づき、その表現が読み手に与える効果を実感しながら情景描写と心情描写について学習した。

② 【手だて2】の実際

〈イメージの違いを感じさせる場の設定〉

実践 I と同様、4人でイメージのずれを見だし、ずれを埋める検討活動である。物語の下書きの言葉や表現について、作者と読み手のイメージのずれを埋めることを目標として検討を行った。物語の下書きを書くページには本研究で設定した「視点」を明記し（図1）、「視点」と照らし合わせて物語本文を読むことができるようにした。また、物語の下書きの周りには余白を大きくとり、読み手が提案を直接書き込めるようにした（図2）。

① 情景描写	A 視覚に訴える表現の工夫
② 心情描写	B 聴覚に訴える表現の工夫
③ 人物・行動描写	C 触覚に訴える表現の工夫
④ 擬音語・擬態語	D 嗅覚に訴える表現の工夫
⑤ 比喩	E 味覚に訴える表現の工夫
	F その他

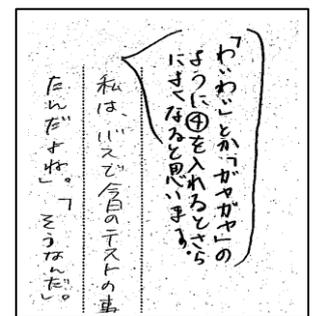


図1 明記した「視点」

図2 書き込まれた提案

以下は、生徒Aの物語についての検討の様子である。

生徒Aの物語の抜粋

招集場所へ行くと、すでにたくさんの人が集まっております、太陽は厚い雲に隠れている。

生徒B 「Aさんは、陸上の走り高跳びの大会の場面を書いたんだよね。」

生徒A 「そう。走り高跳びの本番前の場面。」

生徒B 『『太陽は厚い雲に隠れている』は、①の情景描写

でいいかな。」

生徒A「そう。情景描写を使った。」

生徒B『『厚い雲』という言葉が主人公の気持ちを表しているいいね。』

生徒C「この時の気持ちは、本番前の緊張ということで合ってるかな。」

生徒A「うん。でも、緊張だけじゃなくて、不安な気持ちもある。自分以外は上級生だったから。」

生徒C「じゃあ、隠れているより、覆われて見えなくなっているの方がいいと思う。覆われて見えなくなっているのが太陽の光が遮られて暗い感じを強く受けるから。」

生徒A「あっ、その方が不安な気持ちが表現されているね。そうする。」

生徒C「じゃあ、余白に書いておくれ。」

生徒Cは、物語本文の読み取りと生徒Aへの聞き取りから主人公の気持ちをとらえ、作者の意図に寄り添った別の言葉を提案した(図3)。この提案を受け、生徒Aは「隠れて」と「覆われて」という二つの言葉を比較し、自分の伝えたい気持ちと読み手への伝わり方を考え、「覆われて」という言葉を選んだ。

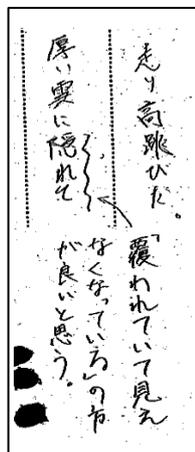


図3 書き込まれた提案

4 変容考察

(1) 生徒が創作した作品の表現の変容から

「視点」を見いだす学習活動、「視点」を基に相互に検討する学習活動の中で、実践Ⅰの短歌の作品、実践Ⅱの物語の作品ともに言葉や表現が変容していった。相互に検討する学習では、自分が伝えたい気持ちや場面の様子がどのように伝わったかを読み手に確認する生徒の姿が多く見られた。以下は、生徒Dの創作した物語の抜粋である。下線と【 】は授業者が付記したものである。

相互に検討する学習活動を行う前の生徒Dの物語の抜粋

一人一人が自分達の欠点を指摘してくる。そして全員の話聞いた先生は、私に向かって

相互に検討する学習活動を行った後の生徒Dの物語の抜粋

一人一人が自分達の欠点を指摘してくる。まるで心臓に注射針をいくつもさされているようだった。【比喩・触覚に訴える表現の工夫】全員の話聞いた先生は、私に向かって

生徒Dは、相互に検討する学習において、主人公の気

持ちが伝わる表現の工夫がほしいという読み手の提案を受け、上記のように比喩・触覚に訴える表現の工夫を使った一文を付け加えた。生徒Dが自身の表現について書いた書評(本単元の最後に、自分で自分の書いた物語を紹介する書評を書かせた)の中に、以下の記述がある。

生徒Dの書評の抜粋

注目したいのは比喩だ。「まるで心臓に注射針をいくつもさされているようだった」という所から、「私」がどれだけ自分の欠点を嫌いなのかがよく分かる。

この記述から、主人公が自身の欠点を嫌う気持ちを読み手に伝えようと比喩を使った表現をつくり出したことがうかがえる。以上の表現の変容と書評の記述内容から、生徒Dは、自分の思いやイメージを読み手により正確に伝えるために、適切な言葉や効果的な「視点」を吟味し豊かに表現しようとするという本研究で目指す生徒像に近づいたといえる。なお、全体の9割の生徒の書評から、生徒Dのような、自分の表現の効果を分析する記述が見られた。

(2) 意識調査の結果から

書くことに対する好感や表現の向上意欲、対話的な学びの意識等9項目で4件法の調査をした。結果として7項目で有意に上昇した。特に、「(物語、短歌、詩などを書くとき)読み手への伝わり方を考えて言葉を選んだり表現技法を使ったりして気持ちや場面の様子を表現しようとしている」という項目で、4件法の中で最も高い「当てはまる」と回答した生徒の人数が、実践Ⅱの事前28%から事後64%と36ポイント増えた。これらのことから、本実践を通して、読み手への伝わり方を考えて言葉を選んだり表現技法を用いたりして気持ちや場面の様子を表現しようとする意識が高まったといえる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

生徒が創作した表現の変容及び意識の向上の点から、程度に個人差はあるものの、本研究で講じた手だてが、自分の思いやイメージを読み手により正確に伝える意識を伴った豊かな言語感覚の育成に、一定の成果を示したと考える。

2 今後の課題

「書くこと」領域において、主に書き手側に焦点を当てた言語感覚を育む学習指導について考えてきたが、今後は「読むこと」領域において読み手側に焦点を当て、言葉や表現からイメージを膨らませて感じ取る言語感覚を育む学習指導について考えたい。